

3

[報告 | report]

ブラジル・サンパウロ人文科学研究所資料調査・中間報告

Interim Report: Archival research for "Centro de Estudos Nipo-Brasileiros", Sao Paulo, Brazil

青木祐一 | Yuichi Aoki

1 — はじめに

本稿では、ブラジル連邦共和国サンパウロ市にある、サンパウロ人文科学研究所(以下、「人文研」)の資料調査について、中間報告をおこなう。人文研の概要については後述するが、ブラジル日本移民の知識人層である「コロニア知識人」によって設立された、ブラジルの日本人移民史、日系人・日系社会に関する調査研究をおこなう民間の研究機関である。調査を実施した日程は以下の通り。

- 第1回 2014年3月2日～11日
青木祐一、調査協力者：
名村優子氏(立教大学院生、人文研日本支部・特別研究員)
- 第2回 2015年3月2日～6日
青木祐一、調査協力者：清水邦俊氏(千葉県文書館)
- 第3回 2015年9月21日～25日
青木祐一

なお本調査は、科学研究費・挑戦的萌芽研究「移民アーカイブズの標準化モデル構築に向けての実践的研究：日系ブラジル移民を対象に」(研究課題番号：25580149、研究代表者：青木祐一、2013年度～2015年度)の一環として実施したものである[1]。

2 — 調査の背景

日本における移民史研究は、戦前の満州移民や、ハワイ移民、北米移民に関する研究は盛んである一方、中南米移民に関する歴史学の観点からの実証的な研究は少ない。ブラジル移民について見てみれば、移民自身による回顧録、聞き書き、移住地や日系人団体ごとの年史類の編さんは盛んに行われているが、その記述の元となった記録史料の保存・利用体制は極めて脆弱な状況にある。また、日本国内についてみれば、地理学・人類学の観点からの研究や図書等の刊行物を利用した研究はみられるものの、一次史料を用いた研究が極めて少ない点が指摘できる。したがって、ブラジル日本移民史研究が研究分野として確立し、発展するためには、まずは関係する一次史料を把握し、それらを利活用できる体制を整えることが前提であり、急務といえる。

日本移民百年(2008年)を経て、最初の日本人移民がブラジルへ渡航してから100年以上が経過している。現在のブラジル日系社会では移民1世がごく少数となり、日本語を理解する者の減少により、現地に残された日本語資料に対する認識は低下する一方である。したがって、これからの移民史研究は、書かれた記録史料を用いた実証的な歴史

3 — サンパウロ人文科学研究所の概要 [2]

サンパウロ人文科学研究所 (Centro de Estudos Nipo-Brasileiros) は、ブラジルの日本人移民史、日系人・日系社会に関する調査研究を行う公益団体として、1965年に設立された。その前身は1946年に結成された「土曜会」にさかのぼる。「土曜会」は齊藤広志、半田知雄、アンドウゼンバチほか、ブラジル日本移民社会「コロニア」における知識人層である「コロニア知識人」によって始まった活動である。日本の敗戦を信じない・受け入れない「勝ち組」と、敗戦を認識し・受け入れた「負け組」が激しく対立・抗争した、いわゆる「勝ち負け抗争」という暗い過去を乗り越え、ブラジルの社会的現実とそのなかにおける日系社会の位置を確認し、そこから新しい生活と行動の理念を築き上げるという目的をもっていた。[3]「土曜会」とは、毎週土曜日に研究会を開催していたところから名づけられている。1965年に現在のブラジル日本文化福祉協会ビル(文協ビル)が完成した際に、民間の研究所として法人格を取得した。現在は文協ビルの4階(現地の表記では3階)フロアの半分を占めている。

人文研の事業内容は定款によれば以下の通りである[4]。

- 1) ブラジル及び日本の社会・文化とそれに関連する問題の研究に寄与する
- 2) 前項に関係ある社会・文化又は歴史的な性格を持つ研究を振興する
- 3) 教育その他の方法によって、ブラジルと日本の諸問題の理解の促進に努め、必要に応じて国内及び国外の同種の団体との交流をはかる
- 4) 会員とその家族及び社会一般の福祉に資する活動を振興する

そのために、調査研究、専門図書館、セミナー、講演、刊行物その他の学問・教養に資する諸活動をおこなうとされている。現在の調査研究活動は、1)ブラジルの日本人移民史、2)ブラジルの日系社会、3)ブラジルと日本の交流史、が主なテーマとなっている。

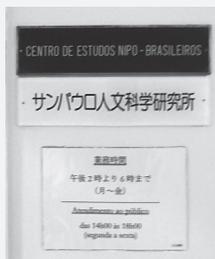
人文研の活動成果の大きなものとして、「ブラジルにおける日系人口調査」(1988～1990年、JICA委託事業)が挙げられる。日本移民80周年記念事業の一環として、ブラジル全土にわたりサンプリングによる日系人口の調査を実施し、ブラ



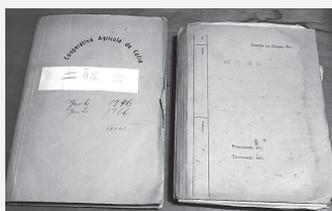
1



2



3



4

- 写真1 — サンパウロ市・リベルタージ「東洋人街」
写真2 — サンパウロ市・サンジョアキン街「文協ビル」
写真3 — 人文研・内部
写真4 — 人文研所蔵「土曜会」ファイル

学研究が重要になると考えられる。また、ブラジルにおける日系社会の希薄化、脱日本語化の状況から、コミュニティの共同記憶の再生産とその継承が極めて困難になっている。したがって、ブラジル日本移民をめぐる記録史料をアーカイブズとして保存し、利活用をはかることは、移民史研究を進める上で喫緊の課題なのである。

その一方、移民という個人の私的活動に伴って発生する記録は、国家の記録体系からこぼれ落ちる存在であり、公的保護の対象から外れやすいものである。個人レベル、民間レベルの資料群を対象とすることで、国家レベルの記録からは見ることのできない、移民個々人の渡航をめぐる状況や動機、渡航前から渡航後までの姿、移住後の生活や活動、それを支えた組織・団体の動向も見えてくるだろう。

以上のような問題意識に基づき、人文研が所蔵する記録史料について、アーカイブズ学の理論と方法論に基づく調査を実施した。以下にその概要を紹介する。

ジル日系総人口数が約128万人(当時)であることを明らかにするとともに、日系人の社会的・経済的状況の実態を報告した。また、『ブラジル日本移民八十年史』(1991年)の刊行にも大きな役割を果たした。

研究レポートや研究叢書を定期的に刊行しており、近年は日本語・ポルトガル語双方の言語で出版をおこなっているのも特徴的である。代表的なものとして、半田知雄『移民の生活の歴史：日本移民の歩んだ道』(1970年)や同『ブラジル日本移民・日系社会史年表』(1996年)などが挙げられる。

人文研には人類学、社会学、地理学、文学などさまざまな研究領域から内外の研究者が集まり、斉藤広志(サンパウロ大学・社会学)、鈴木悌一(同・日本文化)、森幸一(同・人類学)、前山隆(静岡大学・人類学)、三田千代子(上智大学・文化人類学)といった優れた研究者を輩出している。

1974年には散逸しつつある日本移民資料の保存を目的として「コロナ資料保存委員会」が立ち上げられて資料収集事業が始まり、1978年6月、文協ビル内に「ブラジル日本移民史料館」(Museu Historico da Imigracao Japonesa no Brasi)が開館した。この資料収集事業と史料館の設立についても、人文研が大きな役割を果たしている。

人文研には図書・雑誌資料(日本語・外国語とも)が約1万冊余り所蔵されており、内外の研究者の利用に供されている。また、それ以外のアーカイブズ資料として、人文研関係者などから寄贈された文書資料(基本的には日本語資料)を所蔵しているほか、音源資料(人文研主催の講演会や関係者の対談記録)159タイトルが保存されている。これらのアーカイブズ資料は、「コロナ知識人」の幅広い活動を知る上で、貴重な記録である。

4 — 対象と調査方法

人文研では、所蔵する図書・雑誌資料については独自の分類体系に基づいてデータベース管理がされている一方、文書資料については受入れ時の記録も目録も作成されておらず、利用提供は担当者の記憶に基づいておこなわれている状況であった。

したがって今回の調査では、これら資料群の概要目録を作成し、最低限の閲覧提供に資する基礎データを作成することとした。

文書資料はファイルボックス(FB)に収納された分(131箱)と、受入れ時の段ボールのまま保管されている分(45箱)がある。寄贈受入れ時に図書と文書を仕分け・分類したり、箱の

入れ替えなどをおこなっているため、元の秩序は維持されていない状態である。したがって今回の調査では、現在収納されている箱単位で概要目録を作成することとした。

概要目録の作成にあたっては、Excelで調査シートを作成し、位置と箱番号、容器形状、出所情報、資料概要、年代、形態、数量などを箱単位で記録した。

調査の結果、2015年9月段階で17名より寄贈された資料群が存在することを確認したが、出所が不明な資料も存在する。これは、人文研自身が過去に『八十年史』や『年表』などを編さんした際に収集された資料ではないかと考えられる。また、その際に発生した企画段階の資料や原稿なども多数含まれている。

なお、人文研の事務室には人文研がブラジルの法人として作成した、設立以来の事業報告書や理事会議事録などのいわゆる「法人文書」も存在するが、今回の調査では対象外とした。

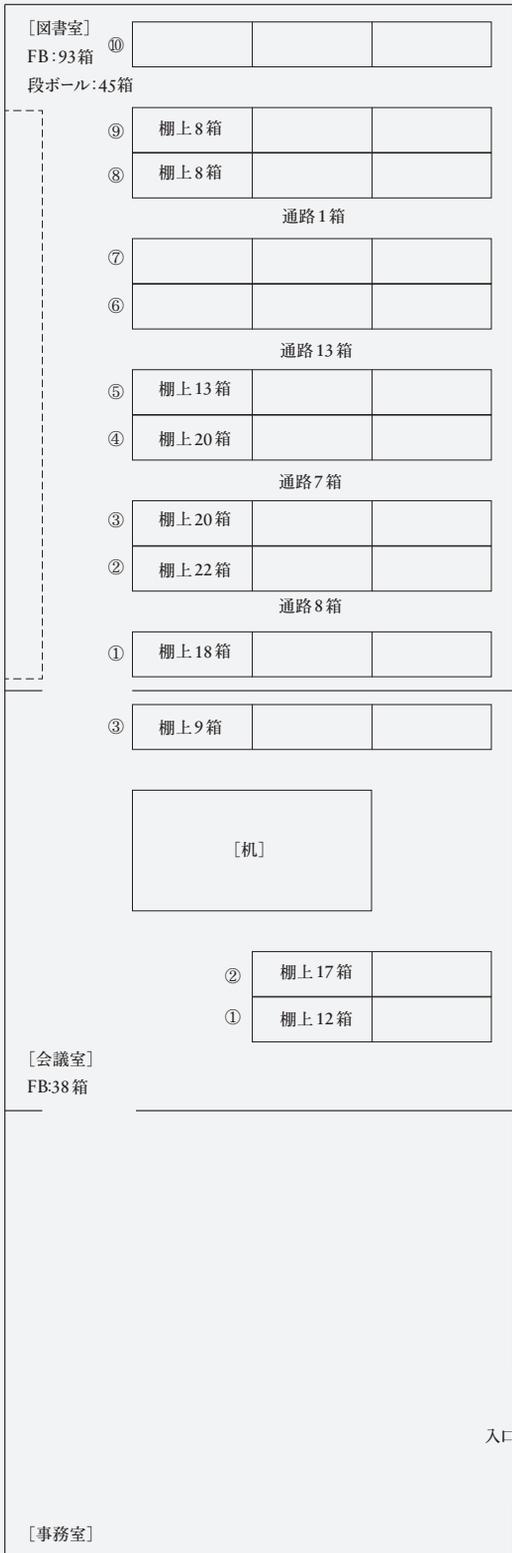
以下、特徴的な資料をいくつか紹介する。まず、「土曜会」設立時の資料で、創立者の1人であった河合武夫が作成した記録である。手帳には「土曜会」設立時の経過が事細かに記されている。次に、増田秀一(恆河)による『エメボイ実習場史』(1981年)執筆時の資料である。「エメボイ実習場」は戦前の日本移民に対する拓殖教育機関としてサンパウロ市近郊に設立され、多くの農業従事者を輩出している。その年史企画段階の検討資料、収集資料、原稿等がファイルボックス7箱分、一括して残されている。

その他に、日系移民の生活実態を明らかにした『移民の生活の歴史』(1970年)を著し、画家であり、「土曜会」創立メンバーのひとりでもあった半田知雄とその妻の日記がある。また、俳句雑誌主催者(清谷益次)による活動記録と日記も残されている。

その他、文協・人文研役員経験者の資料には、文協や人文研の運営に関わる資料、移民史料館立ち上げ時の資料などが含まれる。残存資料の特徴として、大量の新聞スクラップの存在が挙げられる。ブラジルでは数多くの邦字新聞が発行されていたが、それらを見ると日系社会に起こった事件を追うことができるとともに、「コロナ知識人」がどのような事象に着目していたかをうかがい知ることができる。

5 — まとめと今後の展望

今回の調査では、概要調査を実施し、どのようなものがどの



程度の量存在するののかという概要目録を作成するまでを目標とした。それは、時間的・物理的な制約から内容調査にまで至ることが不可能なためである。したがって、今回は資料1点ごと(アイテムレベル)ではなく、資料群全体(ファンドレベル)の概要と構造をまとめて記述する「集会的記述法」を用い、ファンドレベル、ユニットレベルでの概要を記述するまでにとどめることとした。その上で、次の段階の調査に向けての方針やデジタル化、公開の方法などを検討し、人文研に対してアーカイブズの構築に向けた提案や、保存環境の改善に関する提言をおこなっていく予定である。

本研究は、アーカイブズ学の理論と方法論を踏まえた資料調査をおこなうことによって、移民史研究とアーカイブズ学研究の連携を探ることを目的としている。資料群の概要把握、内容把握、構造分析と目録編成、永続的保存措置、利

表— 概要目録の例

部屋	位置	箱番号	容器形状
図書室	棚2上	2	FB
図書室	棚2上	4	FB
図書室	棚2上	13	FB
図書室	棚2上	15	FB
図書室	棚3上	3	FB
図書室	棚3上	6	FB

図— 人文研・見取り図

活用の方法の確立という、一連のアーカイブズ学の手法を加えることによって、ブラジル日本移民関係資料は、歴史資料としての把握から、アーカイブズとしての利活用への道筋をつけることが可能となるだろう。また、保存科学の考えやデジタル技術を用いることで、資料の永続的保存・利用方法を確立し、移民史料の可便性、利便性を向上することが可能となる。単なる歴史学研究ではなく、資料の保存やデジタル化による提供といった、保存と公開・利用の観点を加えることで、アーカイブズとしての持続性、利便性も高められる。以上のような観点から調査・研究を進め、移民史研究の進展に貢献する「移民アーカイブズ」の構築に向けた取り組みの第一歩としたい。

[追記]

本調査にあたっては、サンパウロ人文科学研究所顧問・宮尾進先生、同・鈴木正威先生、星大地氏、松阪健児氏ほか人文研関係者の方々に大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げます。

- 1 — 青木祐一・名村優子「ブラジル日本移民関係資料をめぐる現状と課題：「移民アーカイブズ」の構築に向けて」(日本アーカイブズ学会2015年度大会・自由論題研究発表会、2015年4月、東京大学)において、調査成果の一部を報告した。
- 2 — サンパウロ人文科学研究所HP、<http://www.cenb.org.br/CENB/Home.html>、中牧弘允「サンパウロ人文科学研究所」、『ラテンアメリカレポート』Vol. 12 No.3、1995年、37-40頁
- 3 — 佐々木剛二「統合と再帰性：ブラジル日系社会の形成と移民知識人」、『移民研究年報』第17号、2011年、23-42頁
- 4 — 「サンパウロ人文科学研究所概要：その沿革と研究活動」、サンパウロ人文科学研究所、1981年

出所情報	資料概要	年代	形態	数量
増田恆河エメボイ実習場史資料	原稿下書、関係者住所録、官庁(日本)資料コピー、「同窓会誌」 ①ビニール袋一括：関係者実態調査書、増田秀一より白井晋宛書簡束、関係者住所録(1948年)、エメボイ会会報(1954年)、調査メモ、同窓会誌(1936年)、原稿下書など、 ②ビニール袋入：「エメボイ自習場史」贈呈先、 ③紙ファイル：編輯構成メモ、刊行後の反応「農事実習場同窓会」(記録、1935年)		バラ、ビニール袋入、紙ファイル、帳面	3括(約300点)
増田恆河エメボイ実習場史資料	エメボイ関係新聞の切りぬき(封書)：日本語・ポルトガル語(1980年代)、メモ書、図版版下エメボイ資料(ラフファイル)：新聞記事、増田秀一宛書簡、50周年記念関係(1980年代)エメボイ史原稿(封書)：総会議事録(1974年度)、手書き原稿 高拓生資料(封書)：会報、会員名簿(1981年) エメボイ研究所、一九七九年度栗苗について(封書)：「一九七九年度分譲日本栗品種特徴」、エメボイ会会報第4号(1958年)、エメボイ60周年記事(1991年) 栗・ぶどうと白井さん(封書)：新聞切り抜き(1970年)、研究所収支計算書、総会関係資料		封書、ラフファイル	6括(約300点)
清谷益次日記④	「当用日記」(1952-53年、1959-62年、1966-68年)、2005-2009年日記		帳面	4冊
清谷益次日記②	日記(1950-51年、1982-84年、1999-2004年、1988-90年、1985-87年)		帳面	5冊
半田知雄日記 旅行記	旅日記(1950年代、1976-77年)		帳面	12冊
半田知雄日記 その他	「青空」(詩集、1930年)、 「虐げられつつある民族の研究」(1922年)、 「欧米人の日本発見」(ノート)、 「宗教論コピー」(筆写)、「日本民謡集」、 「正岡子規先生俳諧大要」(筆写)、 「移民夜話」(新聞切抜)、詩集(1928年)、 「唱歌民謡集」(筆写)、「1922年頃の記録」、 「妻の日記抜萃」(「愛はいつまでも」草稿)		帳面	12冊